

〔要旨〕

## 日露戦争以降の朝鮮における軍事基地建設と地域

——永興湾を対象として——

日露戦争以降、朝鮮の植民地化政策を本格化させた日本は、朝鮮への日本の軍事基地建設を進めた。植民地化は、日本が朝鮮を自らの軍事的な拠点として再編していく過程でもあったのである。

そこで、本稿では朝鮮東北部の永興湾の軍事基地建設過程を検討する。永興湾をとりあげるのには、朝鮮東北部が日露両軍の戦場とされたことを踏まえてのことである。戦争初期、東北部はロシア軍の占領下に置かれたが、一九〇四年の夏以降、日本軍はロシア軍を後退させながら東北部を北上した。その際に、後方基地の役割を果たしたのが永興湾である。ロシア軍と対峙する中で日本軍によって建設され、戦後もロシアを牽制する目的を持っていた点が同湾の軍事基地の特徴である。

ところで、日露戦争と朝鮮に関する先行研究においては、直接戦場とされた東北部の状況はほとんど検討されていない。永興湾の軍事基地建設を論じることで、こうした研究状況に介入し、戦場とされた地域の視点から戦争を捉え返すことに寄与できると考える。

日本軍は永興湾において、強権的に土地を占拠し、軍事基地の建設を強行したので、多くの人々が離散を余儀なくされた。一方、自らの土地に住み続けようとする住民もいた。しかし、日本軍による圧迫の下、彼らの生活は困難な状況に追い込まれた。住民は生活を守るために、日本軍に抗議をした。抗議活動の中では、民乱の作法に基づく共同体制裁による参加強制も見られた。これに対して日本

軍による厳しい弾圧があり、住民はさらに不満を強めていった。

ただ、日本軍と住民の関係は複雑なものになっていかざるをえなかっただろう。住民は日本軍に反感を懐きながらも、日本軍に人夫として雇われるという極めて矛盾した状況に追い込まれていったと考えられる。

加藤 圭木